

STYLING

MONO

ウイスキーブランドの中でスクエアのボトルを最初に採用したのはジャック・ダニエルである。手作りの時代において、吹きガラスのボトルは円筒形の方が作りやすかったがジャック・ダニエル氏は頑としてスクエアのボトルにこだわったという。



VOL.49 JACK DANIEL SINCE 1863~

●[ジャック・ダニエル]

Photo / Tomoaki Tsuruda (WPP)
Brown-Forman Beverages Japan
Text / Teruhiko Doi (WPP)



アメリカ南部、テネシー州は8つの州に隣接した州だ。東はアラチャ山脈、そして西側州境にはミシシッピ川が横たわっている。

広大なミシシッピ川流域は古くから氾濫の歴史を繰り返してきた。

特に下流のテネシーやルイジアナ

地域には治水作業や堤防作りに

駆り出された労働者たちが多く、

同時に巨大な綿花の集積地としても

多くの労働力が必要な地域だった。

もちろんそのほとんどは黒人労働者

たちであり、そうした独自の環境から

ブルースやジャズといった

独自の音楽が誕生していった。

特にジャズの発展には軍楽隊の

ブラスバンドと黒人音楽との融合が

大きな影響を与えたといわれており、

19世紀半ば頃の南北戦争などでも

多くの軍楽隊が編成された。

上の写真は19世紀末に

テネシー州で結成された

「シルバー・コルネット・バンド」。

テネシーウイスキーで有名な

ジャック・ダニエル氏が結成した

バンドであり、主に同社蒸溜所がある

リンチバーグ周辺の酒場で

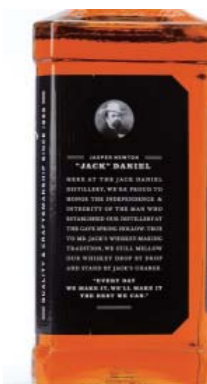
演奏活動していたという。酒場と音楽は21世紀のいまも

幸せな関係であり続けている。そんな音楽の似合うウイスキー

『ジャック・ダニエル』の魅力について、今回は探っていくことにしよう。

MONO

ジャック・ダニエルにはいろいろなエピソードがある。あのフランク・シナトラは歌の中で「テネシー・ティー」と呼ぶほど愛し続け、その棺にはタバコなどの嗜好品と一緒にジャック・ダニエルも入れられたという。

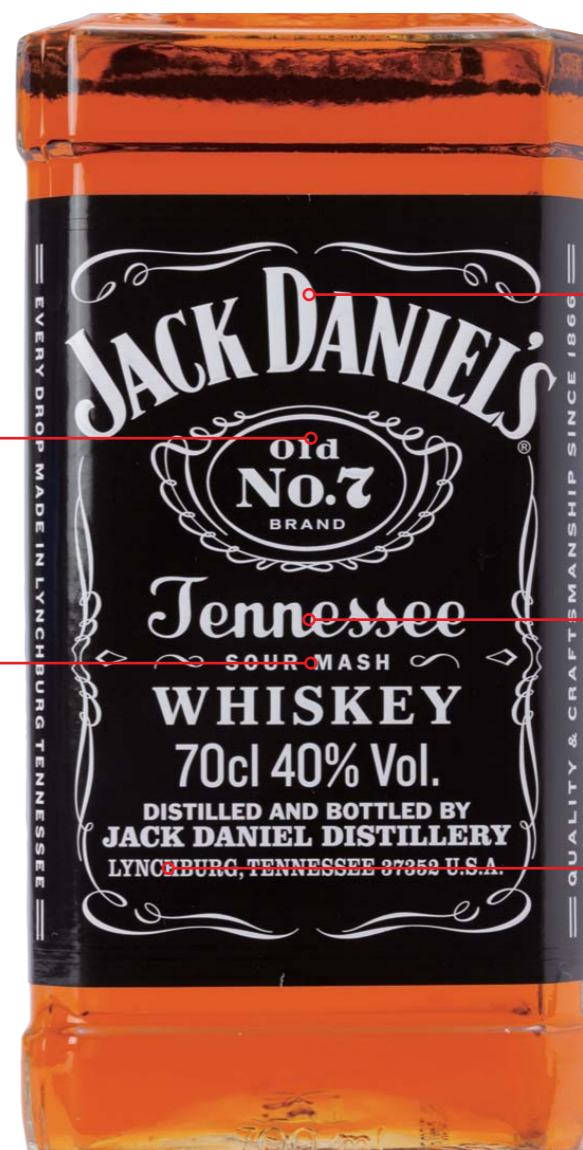


Old No.7

なぜ「7」という数字が採用されたのか実は不明。7番目のレシピや愛人の数など諸説あり、謎のまま。

Sour Mash

ジャック・ダニエルだけの極秘製法。サワードーというパン生地の醗酵に似ていることからそう呼ばれる。



Jack Daniel's

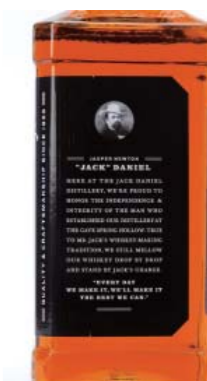
創業者名でありブランド名。世界で最も有名なウイスキーといえるだろう。

Tennessee Whiskey

バーボンとは呼ばない。チャコール・メローイングされたウイスキーは、隣接したケンタッキー州との差を明確にしてテネシーウイスキーと呼ぶ。

Lynchburg

ナッシュビルからずっと南、テネシー州南部の丘陵地帯にある小さな町が生まれ故郷である。



STYLING

MONO

チャコール・メローイングのための
チャコールは、この時代も変わらず
毎日、専門の職人がサトウカエデを焼いて作っている。
その火の勢いを高めるために
蒸溜前のウイスキーをかけて燃やす
光景が、いまもリンチバーグの
蒸溜所の一角で繰り返されている。



創業当時のジャック ダニエル蒸溜
所で働く人々。中央右の白いハット
の人物が、ジャック・ダニエル氏本人。



この世界的に有名なテネシー
ウイスキー・ブランドの創
業者であるジャック・ダニエ
ル氏。本名はジャスパー・ニ
ュートン・ジャック・ダニ
エルで、1850年の9月生
まれ(誕生年と日は定かでは
ない)というのがオフィシャ
ルな記録として残されている。
19世紀のアメリカといえば南
北戦争(1861年~186
5年)が大きな事件で、ちょ
うど11歳~15歳のときにジャ
ック少年は南北戦争を体験し
ていることになる。ジャック
が生まれたのはテネシー州リ
ンチバーグ。貧しい出生だっ
たので、幼い頃から、教会の
牧師であり蒸溜所のオーナー
でもあったダン・コール家で
雇われていた。7歳くらいか
ら働いていたそうだ。

当時のテネシー州では、サ
トウカエデの木炭でウイスキ
ーをろ過する方法が盛んに行
われていた。

蒸溜所を譲り受けたジャック
は、生産性の上がらない木
炭のろ過にこだわった。いず
れにしても1866年頃には
独自の「チャコール・メロー
イング製法」を確立。一度発
酵・蒸溜した後、最初の蒸溜
時のモロミ残液を4分の1ほ
ど加えて再度発酵させるサフ
ーマッシュ方式ででき上った
たウイスキーを、木炭ろ過(チ
ャコール・メローイング)さ
せることでジャック・ダニエ
ルだけのまろやかな味を完成
させたのだ。効率化のために
同業者たちが捨ててしまっ
た手間と職人的なこだわりを捨
てなかったことで、後の成功

われていた。これはバーボン
にはない手法で、手間とコス
トがかかり、量産には向かな
い製法だった。やがてウイス
キーの需要が高まると次第に
テネシー州でもこの製法を行
う蒸溜所はほとんど無くなっ
ていた。ただ、ジャックはこ
の製法でウイスキー作りを覚
え、13歳になった1863年
にダン・コール牧師の蒸溜所
を受け継ぐことになる。折し
もジャックが生まれ育ったテ
ネシー州は南軍に属し、北軍
の攻勢が勢いを増していた時
代。不安だらけの門出だった
はずだ。ただ、リンチバーグ
は片田舎の村であり、綿花の
自由貿易と黒人奴隷の解放に
反対する荘園主たちとは立場
を異にしていたことは、幸い
だったのではないだろうか。



ウイスキーを寝かすためのホワイトオ
ークの樽は、すべて自社生産。クオリテ
ィやフレーバーに関わる部分なので、
他に任せない、というスタンスだ。



ジャックが蹴飛ばした金庫はアー
カイヴに残されている。いまだに
開けられていないそうだ。

なアイコンとして市場に認知
されていくことを計算してい
たとしたら、マーケティングと
して慧眼だったといわざるを得
ない。
ジャックは非常に小さな男
だった。現在もリンチバーグ
に等身大の像が残されている
が、その身長は160cmにも
満たない。しかし、いつもフ
ロックコートとハットを身に
付け、口元には立派な髭を蓄
え、反骨精神たくましい男だ
ったという。同時に多くの愛
人を抱えるほどの好色漢でも
あった。またとても短気な性
格だったことも伝聞されてお
り、近くにあった金庫を蹴飛
ばしてケガを負った傷が元で
爪先から感染症を起こし、61
歳の生涯を終える原因になっ
たといわれている。ポトルに
記されている「OLD NO. 7」
という数字について、7番目
に試した製法であるとか、7
人いた愛人の数とか、あるい
は単なるラッキー7だとか諸
説あるようだが、実は何の数字
なのかは不明のままという。
その秘密をジャックは墓
場まで持っていてしまった。
そんな伝説もまた、このテネ
シー・ウイスキーの大きな魅
力のひとつなのかもしれない。
ジャック・ダニエルの生ま
れたテネシー州は、アメリカ
音楽文化の歴史において重要
な地域だ。黒人音楽発祥の地
であるルイジアナ州と隣接し、
カントリー&ウエスタンの聖

地であるナッシュビルは州都
である。第一次世界大戦から
大恐慌までのアメリカの隆盛
期は「ジャズ・エイジ」と呼
ばれるが、そもそもジャズは
いろいろな音楽や文化がごち
や混ぜになった中から生まれ
てきた音楽だ。黒人労働歌に
教会音楽、軍楽隊が演奏する
軍歌、フォークソングなどが
融合して誕生した。ニューオ
リンズからメンフィス、シカ
ゴへと続くミシシッピ川を
就航する客船の中で演奏され、
その音楽は北上し、シカゴか
ら全米へと広まっていた。
当時のジャズはビックバンド
が中心。無類の音楽好きだっ
たジャックが結成したという
バンド「シルバー・コルネット
・バンド」は、酒場での演
奏活動を熱心に行っていた。
音楽と酒の相性の良さを早く
から見通していたジャックの
戦略だったが、このバンドが
結成されたのは19世紀末のジ
ャズの誕生期と重なっている。
時代的にも、そしてテネシー
州という立地的にも、初期の
ジャズとジャック・ダニエル
が密接な関係であったことは
間違いない。だからであろう
か、ジャック・ダニエルにはい
つも音楽の香りがする。
1866年に製法が確立さ
れたジャック・ダニエルは、以
降ポトルやラベルのデザイン
などいくつかのマイナーチェ
ンジを行ってきたが、基本的
には中身の味は何も変わって

を手にしたわけである。幸い
なことにリンチバーグは、ア
パラチア山脈に抱かれたテネ
シー南部の丘陵地帯に位置し、
水の豊富な土地であった。ジ
ャック・ダニエルは鉄分をま
ったく含まないケープ・スプ
リングから湧き出る自然水を、
創業当時から現在まで使い続
けている。洞窟から湧き出る
この源泉の位置は、いまだ判
っていないらしい。この鉄分を
含まない名水はサワーマツシ
ユに良好な影響を与え、ジャ
ック・ダニエルの味における
秘密のひとつとして大切に守
られている。

ジャックのこだわりはウイ
スキーの製法だけにどまら
ず、当時としては非常に珍し
かったスクエアポトルの採用
にも固執していた。この時代

琥珀のポトルが揺れだしたら テネシーワルツが聴こえてきた



ケープ・スプリングから湧き出る水。水のいいリンチバーグの中
でも、ジャック・ダニエルはずっとこの洞窟の水を使い続けている。

のガラス製品はまだまだ吹き
ガラスによる製造が中心であ
った。しかも産業革命で工業
化が進んだヨーロッパならい
ざ知らず、技術革新の波とは
対極に位置していた19世紀の
アメリカ南部である。製造が
容易な円筒形ではなく、四角
いポトルは生産が難しく金額
も安くはなかったはずだ。だ
がジャックは頑なにスクエア
ポトルこだわった。やがてそ
のオリジナルな佇まいが大き

チャコール・メローイングを
行う様子。このひと手間が、ジ
ャック・ダニエルを世界で一
番有名なウイスキーにした。



いない。ずっと一本のテネシ
ー・ウイスキーのみを作り続
けてきた。驚くべきことに、新
しい製品「ジェントルマンジ
ャック」が発表されたのは1
988年。つい最近のことだ
である。120年目に新製品、オ

リジナルは約150年も変わ
らぬ味。そんな歴史もまたこ
のウイスキーに夢中になる魅
力のひとつといえるだろう。

ジャック・ダニエルは8年以上寝か
せない。1997年発売のシングルバ
レルは、貯蔵庫のトップ階層から選ば
れている。



STYLING

MONO

ジャック デニエルに関する
お問い合わせは
㈱アサヒビール
☎0120-011-121
<http://www.asahibeer.co.jp>
公式サイト
<http://www.jackdaniels.com/>



↑テネシー州南部の丘陵地帯
リンチバーグにあるジャック
デニエル蒸留所。
→創業者ジャック・デニエル氏



1895年頃に使用されていたボトル。スクエアなフォルムも含めて、いまとほとんど変わらないデザイン。

スコッチでもなくバーボンでもない。テネシー・ウイスキーという呼称にこだわるのは、ジャック デニエルがこの地でしか作れないから。



ジャック デニエル シングルバレル
リンチバーグの貯蔵庫で一番上の階層から選ばれた、男の味がするジャック。
オープン価格



ジェントルマンジャック
テネシー・ウイスキーならではの、チャコール・メロイニングを2度行ったマイルドな逸品。
オープン価格



ジャック デニエル ブラック
1866年に製法が定まってから約150年近く作り続けられているテネシー・ウイスキー。
オープン価格